

児童文学

富永 千晴 廣川 友美 元村 栞 山下 愛

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

子どもに親しまれている昔話は、その当時の時代背景を主に書き換えられていることが多く、戦争や教育方針などが関係している。例えば、日本昔話は主に子どもの成長に悪影響とならないようにと良い話へと変換されて伝えられた場合が多く、その時代特有の教育的な考え方によって様々に書き換えられているのである。このように、時代と共に書き換えられてきた昔話であるが、書き換えられる前の物語はどのようなものであり、どの部分が書き換えられてきたのであろうか。そこで、本研究では日本昔話や西洋で有名なグリム童話に注目して、その詳細を明らかにすると同時に、書き換えられなかった物語として有名な「星の王子様」についても考察していくことにする。

1 章 あらすじ

昔話は長年受け継がれ、子どもから大人まで多くの方に愛され、子育てにも役立っている。このように我々の身近にある昔話であるが、日本だけでなく世界にある昔話は時代と共に変えられている。では、何故書き換えられたのだろうか、何故書き換えられてまで受け継がれているのだろうか。そこで、この章では日本にある昔話や日本でよく知られている海外の昔話に注目して、今と昔の違いを明らかにしていくことにする。

1.1 節 日本昔話

昔話は文芸であり、その文芸性は伝承を垆堦として練られてきた。例えば、語り手の祖父母や親達は、幼い頃に繰り返し聞かされた話を年を経て改めて孫子に語って聞かせる。そして、語り手は幼い聞き手を喜ばせようと、子どもの気に入る内容に整え、分かりやすい表現や言葉を用いる等、古い話を新しい世代に合わせて語り変えるのである。その為、子どもに分かり辛い用語は改められ、納得されない筋は変えられる等、文学の創作が作家個人の密室での営みであるのに対して、昔話文芸は語り手と聞き手が伝承の中で何世代、何十世代もの営みを経て練り上げてきたものなのである。そこで、以下では猿蟹合戦と浦島太郎を具体例として取り上げて、昔話の時代による変遷点を明らかにして行く。

はじめに、猿蟹合戦について紹介する。昔の猿蟹合戦には国定教科書で「猿蟹合戦」の名で普及した「仇討ち型」と近年絵本等で、「猿の尻はなぜ赤い」の名で知られる「尻はさみ型」がある。

仇討ち型では蟹がにぎりめしを拾い、猿の拾った柿の種とにぎり飯を交換する。蟹が種をまき、生えねば摘み切る、ならねば摘み切る、売れねば摘み切ると脅し続けると、柿はみるみるうちに成長してよい実をつける。それを見た猿は「実をとってやる」と木に登って一人で熟れた柿の実を食い、青い実を蟹に投げつけて殺すのである。そして死んだ蟹から生まれた子蟹達は、栗・蜂・牛糞・臼を仲間に猿の家へ仇討ちに出かけてあちこちに潜み、帰宅した猿に対して囲炉裏に隠れた栗がはじけ、水瓶に隠れた蜂が刺し、牛糞が足を滑らせ、臼が落ちつぶし、最後に子蟹が猿の首をはさみ切るのである。この仇討ち型を基にした話が私たちがよく耳にする昔話「猿蟹合戦」であるが、現代では蟹や猿は怪我をする程度で、猿は反省して平和に暮らすと改作されたものが多く出回っている。これは「敵討ちは残酷で子どもの教育上問題がある」という意見の為であり、タイトルが「さるかに話」等といったものに変更されているのもその為である。しかし、子ども

お問い合わせ先：〒814-0198 福岡市城南区別府 5 丁目 7-1 中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治研究室 mail:hashimot@nakamura-u.ac.jp

たちにこれから大人になっていくにつれて様々な困難が待ち受けている事を、日本が古くから伝えてきた昔話を通して伝える為にも、本来の内容を復活させるべきという声が多く上がっていることも事実である。一方、尻はさみ型では猿が成長した木に実った柿を独り占めしようとするところまでは同じ展開であるが、蟹の方がずる賢く描かれている。木に登った猿に対して柿の実を袋に入れて、さげた枝を揺すらせ、蟹は落ちた袋を小さな穴の中に引き込むのである。そして、袋を渡さねば糞を放り込むと穴に尻を向けると、蟹はその尻を挟み、猿の尻は毛が切れて赤くなるのである。

次に、浦島太郎の話について紹介する。浦島太郎の話がいちばん古く文献に残っているのは「万葉集」と言われているが他にも「日本書紀」「風土記」「御伽草子」にも描かれており、また、幸田露伴、森鷗外、太宰治等の文豪達も、書き残している。

室町時代から江戸時代に描かれた御伽草子では、丹後の国の浦島が釣りあげた亀の願いに応じて海に放した翌日に美しい女性が端舟に乗ってただよっているのに会い、海難にあったという女性を十日余りかけて本国へ送り返してやるというものである。女性は夫婦の契りをしたいと願い、四方に四季の草木を現わす竜宮城に案内して、そこで浦島は三年暮らす。しかし、浦島が故郷の父母に会いたい旨を言うと、女房は実は助けられた竜宮城の亀だと告げ、形見に筍を与え、筍は開けるなど告げるのであるが、帰郷した浦島は七百年たった故郷の変わりざまを悲しみ、筍を開け、一度に年を取り、やがて鶴になって空へ飛び立つのである。それが昭和時代になると、漁に出た浦島は魚が一匹も釣れずに帰ってくると、子どもたちが小さな亀いじめているという始まりになっている。浦島はありったけの金を子ども達に払い、亀を助け海に放すのであるが、次の日、浦島が釣りをしていると、大きな亀が「昨日の亀が助けてもらったお礼に竜宮城に連れてくるように言われた。」と現れ、浦島は言われるままに亀の背中に乗り竜宮城に着くのである。竜宮城ではごちそうを食べ、楽しく過ごしていたが、ある日、ふと村のことを思い出し帰りたくなった浦島が別れを告げると乙姫は箱をつくれ、決して開けるなど告げる。しかし、村に帰ると三百年が経っていることを知ったら寂しくなった浦島は玉手箱を開き一度に年を取るのである。

最後に、桃太郎の話について紹介していく。桃太郎の話は明治時代初期までは「桃を食べて若返ったお爺さんとお婆さんの間に桃太郎が生まれた」という回春型の話が主流であった。また、桃太郎の成長過程についても、働き者に育ったとする場合や怠け者する場合がある。

昭和時代に描かれた桃太郎では「川で洗濯していたお婆さんが流れてきた桃を持ち帰り、桃を割ろうとすると中からかわいい男の子が生まれた」というように、明治時代初期と桃太郎の誕生の部分が変化する。また、内容については「カラスから鬼が姫をさらったと聞いた桃太郎はきび団子を持って、途中で犬・猿・きじを供にして鬼が島に向かい姫を取り戻し、姫と幸せに暮らした」となっている。それが平成時代になると、桃太郎誕生の部分は昭和時代と同じであるが、内容については「鬼ヶ島の鬼が人々を苦しめていることを知った桃太郎はきび団子を持って、途中で犬・猿・きじを供にして鬼が島に向かい、鬼を退治して、お爺さんお婆さんと幸せに暮らした」となっている。

1.2 節 中国の昔話

『牛飼いと織姫』について、年ごろになった娘に父親が牛飼いの彦星を紹介したことで仲良くなった2人が、お互いの仕事をしなくなった為に織姫の父親に引き離されるのであるが、泣き続けている織姫を可哀そうに思い、真面目に仕事をしたら七月七日に会わせる、という話が日本では伝えられている。しかし、『牛飼いと織姫』は元々中国の昔話であり、中国では以下のように伝えられているのである。

はじめに、中国では彦星ではなく牛飼いとして登場している。牛の言うとおりに過ごしていた牛飼いは、ある日、「織姫がお前の嫁だ。織姫が水浴びをしている間に衣を隠しなさい。」と言われ、牛に従って衣を隠すのであるが、水浴びを終えて帰ろうとした織姫は衣がないことに気付い

て泣き、牛飼いは「あなたの衣はわたしが預かっています。どうぞわたしの妻になって下さい。」と言ったのをきっかけに牛飼いと織姫は夫婦になるのである。そして、男の子と女の子を授かり、とても幸せに暮らしていたが、織姫が帰ってきていないことに気付いた西王母（織姫の母親）が天の将兵をつかわせて織姫をつれていってしまうのである。子どもは泣き、牛飼いが途方に暮れていると、牛が「私が死んだら皮をはいで縫い合わせ、中にもみがらを詰めなさい。それから、二つの籠にそれぞれ子どもを入れててんびんで担ぎ、わたしに乗りなさい。」と言った直後、牛は雷に打たれ死んでしまう。牛飼いは牛に言われた通りにして牛にまたがると、牛は地を蹴って飛び上がり、織姫に追いつきそうになるのであるが、西王母が銀のかんざしを抜いて空を切った為に牛飼いと織姫は離れ離れになってしまう。その時にできたのが天の川である。西王母は牛飼いと織姫が泣いていることを可哀そうに思い、七がつく日（七日、十七日、二十七日）に二人が合うことを許して、カササギに伝えるよう言ったのであるが、カササギは絶えず「七、七、七」と繰り返していた為に七月七日に合うようになった、と中国では伝えられているのである。

次に、西遊記が小説でこの世に登場したのは明・清の時代（1400～1900 年頃）であるが、この時代を基にした西遊記の物語が突然に考え出されたのではなく、玄奘三蔵がお経を求める旅をしたのは事実であり、「大唐西域記」という旅行記（西暦 7 世紀前半）に記され、それが「西遊記」の物語の元になったといわれている。日本では西遊記はドラマや映画等になっているが、原作とは違うところがいくつかある。例えば、2006 年のドラマと比較してみると大きく違うところが 4 つある。1 つ目は、筋斗雲はドラマでは雲ではなく、通常は小さな羽の形をしており使用する際に懷から取り出す道具として描写されているが、本来は雲で描かれている。2 つ目は、ドラマでは四人全員徒歩で旅をしているが、本来は三蔵法師の愛馬玉籠で旅をしている。3 つ目は、ドラマでは孫悟空達は思いつきで三蔵法師に弟子入りしているが、本来は度が過ぎる程の大暴れにお釈迦様が怒り、500 年間五行山に閉じ込められ、助けを請うた観音様に命じられて三蔵法師に弟子入りしたのである。また、沙悟浄と猪八戒もそれぞれ別の場所で悪さをして、観音様に諭され三蔵法師の弟子になっている。つまり、三人はそれぞれの罪を悔い改める為に観音様の指示で三蔵法師を待っていたと言われている。4 つ目は、三蔵法師はドラマや京劇で女性が演じられていることが多いので女性だと誤解されがちだが本来は男性である。その他にも、小説では五行山に閉じ込められると書いてあるものや五行山の下敷きにされるというものもある。

1.3 節 グリム童話

グリム童話集が初めて世に出たのは、18 世紀後半から 19 世紀にかけてドイツ文学のひとつの絶頂期であった 1812 年のことである。しかし、その少し前までドイツの文化はヨーロッパの他の国と比べて遥かに貧弱であった。それは国が何百もの群小国家に分裂していたからであり、三十年余り戦争によって国土が荒廃していたことも要因の一つである。また、国がナポレオンに占領された為にドイツ・ロマン派はドイツの国家体制の転覆へと向かわず、民族意識の高揚を目指していた。この民族意識・愛国精神が最大の動因となって、ゲルマン民族の歴史、神話、伝説、民話、民謡、ドイツ語等に対する関心が高まり、グリム童話集もそうした民族意識から生まれたのである。

グリム童話とはヤーコプ・ルードウィヒ・カルル・グリムとヴィルヘルム・カール・グリムからなるグリム兄弟によって編集されたものであり、このグリム兄弟によって 1812 年に『グリム童話』が最初に発刊された。1812 年に発刊された第一巻の売れ行きは順調となり、その後、第 7 版まで出版され、この第 7 版がグリム兄弟生前最後の版となった。尚この童話集は同業者や批評家たちから批判された為、グリム兄弟は版を重ねるたびに童話集に手を加えている。これまでのグリム童話の日本語は大抵がこの第 7 版に基づいている。グリム童話集を作成したグリム兄弟はドイツに伝わる物語を集めて本を出版しようと考えた。よって、グリム童話集に収録された物語の 4 分の 1 は中世から伝わる文献に基づくものであり、古い本から書き写しただけの物語とな

っており、残りの4分の3は知り合いのお嬢様から聞いたものである。以下では、『グリム童話』のいくつかの物語、「白雪姫」と「あかずきん」について紹介していくことにする。

はじめに、『白雪姫』について紹介する。「魔女である意地悪な継母から殺されそうになる幼い姫」というのが、一般に知られている『白雪姫』の母娘の関係であるが、原作では白雪姫を死にいたらしめようとしたお妃は継母ではなく、白雪姫を産んだ実の母親である。初版には白雪姫を産んだ母親が死んだということも、その後、継母が迎えられたということも記述されていないが、グリム兄弟は1819年に発刊した第2版からそれまでの実の母親を継母に変えているのである。

次に、『赤ずきん』について紹介する。『赤ずきん』には、グリム兄弟が編集したものとペロー童話が編集したものとがある。ペロー童話とは、大王とも太陽王とも呼ばれたルイ14世の大家臣シャルル・ペローが17世紀の終わりから18世紀にかけて、フランスの口伝のお話をもとにした洗練された甘美な物語「妖精物語」を甘いばかりでなく、鋭さを加えた昔話として編集したものである。ペローは自分の息子の名前を使って、1697年に「過ぎし日の物語または昔話集・教訓つき」を出版しており、ヨーロッパで人気のある昔話の殆どがペローの「昔話集」に入っている。

グリム童話による『赤ずきん』では、赤ずきんと呼ばれる女の子がお使いを頼まれて森の向こうのおばあさんの家へと向かうが、その途中で一匹の狼に遭遇して道草してしまい、その間に狼が先回りしておばあさんの家に行き、家にいたおばあさんを食べてしまうというものである。そして、赤ずきんがおばあさんの家に到着するとおばあさんに化けていた狼に赤ずきんは食べられてしまうが、その後、満腹になった狼が寝入っていたところを通りがかった猟師が気づき、狼の腹の中から二人を助け出して、腹の中に石を詰め込まれた狼はその重さで倒れて死んでしまうのである。一方、ペロー童話による『赤ずきん』では、赤ずきんもおばあさんも死んでしまい、赤ずきんが食べられたところで話は終わり、猟師は登場しない。さらに、ペロー童話では元の話にない「教訓」を加えているのである。

2 章 昔話の変遷

昔話の殆どは現代に至るまでに何らかの形で物語に手が加えられているおり、物語から削除されているものや新しく付け加えられているもの等様々である。そこで、この章ではなぜそのように手を加えたのか、または、手を加えなければいかなかったのかについて、現代に残されている資料を手掛かりにその真相を探っていくことにする。

2.1 節 日本昔話の伝承

初めて言葉を持った太古の人類は、自分の思いを表現して伝える為の手段として、絵画や造形だけに留まらず、物語等を言葉により語り継ぎ、それを子孫や異民族の人々に伝えようとした。そして、その役割を果たしてきたのが口頭伝承を専業とする「語り部」である。語り部の口承した物語や歌謡は神話または伝説と呼ばれ、神々が物語の主人公として登場することから、その神秘的な内容を信じる特定の語り手と聞き手によって伝えられた。すなわち、昔話も語り手から聞き手に口承される物語であり、神話や伝説と連続的な関係を持っている。但し、神話や伝説と異なる点は特定の人物によって語られるのではなく、それを語り広げるのが不特定多数の人物であることである。その為、聞き手に気に入られた昔話は長く人々の間に語り継がれ、広い地域に広がり、一つの地方や一つの民族に共有される話となったのである。

口頭伝承と呼ばれる神話や伝説と昔話との違いとして、神話とは人類が認識する自然物や自然現象、または、民族や文化・文明等の様々な事象を神等の超自然的な存在や文化英雄と結び付けた一回限りの出来事として説明する物語である。また、伝説とはある特定の人物や時・場所と深く結びつき、少しは信じて欲しいという心持ちを含んで説明的に語り継がれる話

である。一方で、昔話は具体的な内容については漠然とした話題が多く、語る者も子ども用の架空の物語であることを自覚して話さなければならない。また、昔話には「昔々あるところに」等の決まり文句で始まり、「したとさ」という伝聞の形で1文が終わり、「めでたし、めでたし」等の決まり文句で終了するという一定の語り方やリズムが存在しており、話の途中を省略してはならないことや付け足してはいけないこと等、決まりごとが存在している。

このように、昔話は話すことで語り継がれてきた話である為、地方によっても内容は異なり、どれが正しい話であるかといった結論がある訳ではない。但し、昔話は親が子どもに聞かせる場合が多く、その為、子どもの成長に悪影響とならないようにと良い話へと変換されて伝えられた場合が多く、その話が子から子へ、孫へと伝わったと考えられている。すなわち、その時代特有の教育的な考え方によって昔話は様々に書き換えられているのである。

2.2 節 中国の昔話の伝承～七夕物語～

七夕物語では前章で述べたように中国の七夕伝説では古典の詩歌に詠われた牽牛星、織女星の話に羽衣伝説が加わり、複雑な物語となっており、その中では老牛や牛の皮が重要な存在となっている点の一つの特徴である。また、牽牛と織女が二人の子をもうけるという点や嘆き悲しむ織女を見かねた天帝がカササギに命じて橋を作り、二人が一年に一度だけ会えるようにしたという点も中国の伝説の特徴と言える。これらの諸点から、古典の中の七夕話が長い経過の中で変化・発展して今に伝わっており、その伝説は以下のように形成されてきたのである。

初めに、胚胎期では織女と牽牛という名前が初めて登場するのは戦国時代ころまでの詩を集めた『詩経』である。しかし、そこには星の名称として「織女」、「牽牛」とあるだけで、二人の恋愛の話は全く見られないのである。次に、雛形期では漢代に編纂された『文選』中の古詩に「二人が天の川の兩岸に別離して話をすることができない」と表現されている。また、形成期として南北朝時代に七夕伝説が次第に形成されていく。『文選』によると牽牛は夫で織女は妻であること、織女と牽牛の星はそれぞれ銀河の傍らにあること、1年に一度7月7日に会う事などが書かれている。更に、3世紀の初頭には二人が7月7日に会うという話が次第に形成されてきたのである。そして、6世紀頃書かれた『荊楚歲時記』にはこれらの話がまとまって紹介されており、唐代頃になるとカササギが橋の役割をして、二人が会うのを手助けするという話が生まれ、宋代に七夕物語は盛んに発展したのである。

以上のような過程を踏んで七夕伝説は徐々に成立してきたのである。また、古典文学として上記のように成立してきた七夕伝説であるが、長い歴史の中で中国各地の民話としてさまざまなバリエーションを生じるに至っている。日本に伝わった七夕伝説が日本人に好まれるようなロマンチックな物語に日本化されてきたように中国の中においても現代では地域差が見られるのである。つまり、類似点を持ちながらも伝説や昔話としてある話、七夕にまつわることとして言い伝えられている話があり、両者は必ずしも同じではないのである。

2.3 節 中国の昔話の伝承～西遊記～

西遊記は玄奘が1万キロ以上の道のりと長い歳月をかけ、中国、長安から仏教発祥の地、天竺へと旅した実話であり、三蔵法師はその実在の玄奘を元に描かれている。しかし、それ以外の登場人物、孫悟空・猪八戒・沙悟浄については実在しておらず、そのモデルすら存在しない。では何故作者は猿、ブタ、河童というこの三人を従者として登場させたのだろうか。実は、西遊記とは玄奘が残した旅の記録に元々中国に伝わる神話や民話を加えて完成させた物語なのである。

孫悟空については、中国においては釈迦の弟子の一人が猿の生まれ変わりとされており、猿は神のような存在であった。その為、西遊記に限らず仏教にまつわる数々の神話に猿が登場することがあり、実際、西遊記の中でも孫悟空は如意棒を自在に操り、72変化の術に不老長生の術を手

に入れる等、非常に靈力の強い存在として描かれているのである。次に、猪八戒はイノシシであり、中国では猪は靈力を持ち、旅の道案内役と信じられ数多くの神話に登場している。但し、西遊記では猪八戒のコミカルな面を強調する為に猪というよりもブタに近く描かれたのである。また、沙悟浄は元々中国では河童ではなく凶暴な妖怪であり、「三蔵法師を前世で9回に渡って殺してきた天敵」という設定であり、コミカルな猪八戒とバランスをとるキャラクターとして加えられたと言われている。このようにして西遊記という三蔵法師の旅を彩る個性豊かなキャラクター達が誕生したのである。

実際には玄奘は往復17年に及ぶ旅の果てに経典を持ち帰り、残りの生涯をかけて死ぬ一ヶ月前までの19年もの間、中国に訳し続けたのである。そして、玄奘の死後およそ900年もの歳月を経て、彼の成し遂げた偉業を伝える為に名作「西遊記」はここまで伝えられてきたのである。

2.4 節 グリム童話の変遷～白雪姫～

変遷の背景には様々な理由が隠されているが、その殆どが削除された形で存在している。その中でも徹底的に削除されているのが、性をほのめかす描写である。

現代に知られている白雪姫としては、この世で最も美しいと謳われる白雪姫に嫉妬した妃があらゆる手段を使って白雪姫を殺そうとする、というものである。しかし、原作ではもう一つの理由として、王様と白雪姫の近親相姦という残酷な部分が描かれていた。原作での王様は幼児性愛者として描かれており、白雪姫が生まれる前にも幼い姫と関係を持っていたが、妃は自分が妻だという事実に支えられながら耐え忍んでいた。しかし、可愛らしく美しく育つ白雪姫にも王様の手が伸びていたことを知り、嫉妬と孤独に苛まれ「白雪姫を殺す」という答えに辿り着いたのである。また、獵師に逃がしてもらい七人の小人に助けられた白雪姫は家事などの手伝いをする事で小人達と暮らしている事が描かれているが、ここでも性的表現が削除されているのである。原作で白雪姫は家事を手伝いながら、いつしか小人達の夜伽の相手をするようになっていくのである。更に、毒林檎を喉につまらせて仮死状態となり、王子と出会う場面が良く知られているが、原作ではこの王子は死体愛好者として、死体にしか性欲が湧かないという人物として描かれているのである。このような性的な場面が削除されている理由としては、ライバルの同業者や批評家達からグリム兄弟へ様々な批判が浴びせられたことにある。

このような卑猥な表現が含まれている物語を、無垢な子どもに顔を赤らめずに話すことができるか」や「語り手の粗野な表現をそのまま用いた為、物語が損なわれている」等の批判を受け、版を重ねる度にグリム兄弟はその時代に合った形へと手を加えたのである。また、グリム兄弟は暴力や残虐性には比較的寛容であったが、性的な表現にはこの上なく厳格であったことも要因の一つと考えられている。

2.4 節 グリム童話の変遷～赤ずきん～

グリム童話は世界中の人々に読まれ、親しまれている。その中でも「赤ずきん」は知らない人がいないほど語り継がれている。グリム兄弟は何よりも昔話に込められている人々の心を大切にそれを後の代に伝えようとした。しかし、この物語の起源を辿ってみると、あるものはドイツ民族の歴史よりさらに古い起源を持ち、その中にはグリム童話の少し前の時代に近隣の国々から伝えられた話もある。例えば、「赤ずきん」では古代ローマに既に赤い布をかぶって狼と暮らしていた「黒い森の乙女」という少女の話が原型として考えられている。また、グリム童話と並んで有名なものにフランスのペローの「赤ずきん」が存在するが、これは赤ずきんもおばあさんも死んでしまうというショッキングな結末となっている。警告を発するというのも物語の役割であり、それに限って言えばペローの結末の方がグリムのほっとする結末よりも強烈な印象を残している。しかし、ペローは自分の物語に道徳的教訓を盛り込もうとした為、物語本来の素朴な味わいが薄

れてしまっていると感じる人もいるようだ。ペローの「赤ずきん」には最後に短い教訓詩がついていて、そこでは狼が赤ずきんを誘惑する男性として描かれている。こうした作家独自の解釈は興味深いのだが、一方で物語の持つ多様な意味を自由にくみ取る楽しさを損なうことになりうる。グリム兄弟の「赤ずきん」も手を加えられているが、そうした豊かさを失っていない。グリム兄弟は、物語に整合性をもたらそうとした節があり、悪者はとことんひどい目にあい、いい者はこのうえなく幸せになるよう配慮されているのである。

一つの物語が作者や時代によって様々な結末で語り継がれているが、それぞれの年齢や境遇に応じて自分なりの意味を引き出すことができる。幾世代にもわたって語り継がれてきた物語には、それだけの深さがあるのではないだろうか。

2.6 節 変わらない物語

星の王子さまは、小さな星に住んでいた王子さまが世話をしていたバラとささいなことで言い争い、星を飛び出しているんな星を巡り、奇妙な大人達に会うという物語である。そこで出会う大人達は命令ばかりしている王様や街灯を点けたり消したりしている街灯マン、旅行もせず人の話だけ聞いている地理学者である。そして、王子さまは最後に地球にたどり着き、壊れた飛行機を修理している飛行士と出会い、これまでの話を聞いてもらうのである。次に砂漠でキツネに出会い、肝心なことは目には見えないということ、「心で見なくちゃ」ということを王子さまは知るのであった。それがきっかけとなり王子さまは小さな星で世話をしていたバラを想い出して「世話をすることは相手に責任を持つことだよ」と教えられ、小さな星の一輪のバラのもとに帰る決心をする。最後には、王子さまは星に帰る為に金色の毒ヘビにかまれ、自分のからだを捨てて小さい星に帰るのである。

王子さまは物語の中で6つの星を旅し地球に帰ってくる。この6つの星にはどのような意味が込められているのだろうか。1つ目の星の住人は王様である。この人物は作者が空軍省で目撃した“架空の権力でしか有しない大臣”を表していると言われている。2つ目の本四の住人であるうぬぼれ男はどこにでも見られる人間のタイプである。王様と比較すると人間を家来としか見ないように、相手を賛美者としか見ないのである。3つ目の星の住人である呑み助は作者自身の戯画という説もあり、面白おかしく描かれている。4つ目の星の住人である実業屋は王子さまからは「赤黒っていう先生」と言われ、赤い色をした毒キノコになぞらえて描かれている。本当に大切なものを知らないくせに、尊大に構えた態度、内容空疎なけばけばしさ、有害無益な寄生的性格などマイナスなイメージが投影されている。5つ目の星の住人である点燈夫は奉仕と忠実さの代表であり、作者の愛読書だったアンデルセンから着想されたものとも言われている。作者の愛読書から着想されたこともあり1番好きな星だと言っているのではないかと考える。6つ目の星の住人である地理学者は夢見心地を軽蔑する傲慢で勤勉な実業屋に似ている。違うのは、数字ではなく情報が問題になっている点だけで彼もひたすら間接的な手段による情報収集を真の知識と混合しているのである。

3 章 現代の絵本

様々な形で語り継がれてきた絵本であるが、その形は今も変わらず新しい絵本の物語として語り継がれている。そこで、この章では現代ではどのような絵本が子ども達に人気であり、また、どのような影響を及ぼしているかについて、資料をもとに調べていくことにする。

3.1 節 絵本が与える影響

昔話は昔から語り継がれてきた民衆の生活の中から生まれた物語である。昔話には貧困であったり、弱い立場にいる主人公が様々な試練を乗り越えて幸福を手に入れる、または、正直で正しい者が良い目をみて欲深く意地悪い者が罰せられるという特徴があり、善悪についても自然と理解するようになる他、昔話を小さい頃から読むことは健康な自我形成に役立つと考えられている。

これらの本が子どもに与える影響は大きく分けると二つである。一つ目は言語発達についてであり、生まれたばかりの赤ちゃんは話も出来ず、周りの話す言葉も理解することができない為、毎日家族が話しかけることで周りの音を聞きながら言葉を理解する。そして、次に言葉を話すようになり、喃語から意味のある言葉に移るのであり、その後、読むことができるようになり、自分の頭で考えて書くことができるようになるのである。この言語発達過程は更に理解言語と表現言語に分けることができる。理解言語は聞く・読む、表現言語は話す・聞くであり、理解表現が先に発達して表現することができる、つまり、十分な言葉を聴いて豊富な量の本を読むことが、自分の考えを話し書くことに繋がるのである。

二つ目は間接経験に影響することであり、子どもの想像力は大人の想像を遥かに超えることが多く、その想像力を育むのはテレビではなく本であると考えられている。テレビを見ていると画像と内容が結びついて記憶されることから、想像力を働かせる必要がなく、何を考えずにいても自動的に見せられている状態になる為、頭自体が働いていないということになる。よって、どれだけメディアが発達しても本は自分で考えることを促して、子どもは絵本を見ながら本の主人公になりきる為、想像力を豊かにするのである。

3.2 節 絵本の推移

これまで昔話について述べてきたが、現代の保育現場では昔話が読み聞かせとして使われることは少ない現状にある。そこで、読み聞かせとして使われている絵本の変化を 1960 年代から 1990 年代までの時代ごとの絵本を例に挙げてそれぞれ 5 冊ずつ紹介する。

おおきなかぶ



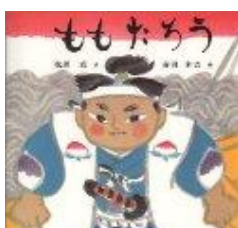
ねないこだれだ



わたしのワンピース



ももたろう



だるまちゃんとてんぐちゃん



1960 年代の絵本

モチモチの木



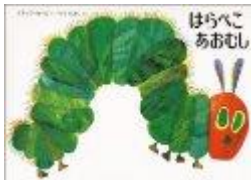
しろくまちゃんのほっとけーき



はじめてのおつかい



はらぺこあおむし



かいじゅうたちのいるところ

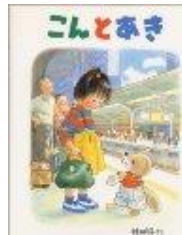


1970 年代の絵本

きんぎょがにげた



こんとあき



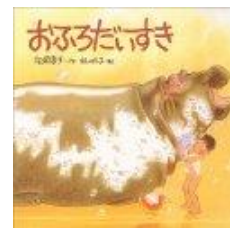
まどからのおくりもの



ノンタンシリーズ



おふろだいすき



1980 年代の絵本

きょだいなきょだいな



葉っぱのフレディ



まあちゃんのながいかみ



そらめくんのベッド



めつきらもつきらどおんどおん



1990 年代の絵本

このように、1960 年代までは昔話が読まれているが、それ以降読まれている絵本の中に昔話は入っていない。また、昔話以外の紹介した殆どの絵本は現在も保育現場で多く使われていることから、昔話が読まれることが少なくなっていることが分かる。

まとめ

これまで日本にある昔話や日本でよく知られている海外の昔話に注目して、今と昔の違いについて明らかにしてきた。私たちの身近にある昔話が何故書き換えられてきたのか、何故書き換えられてまで現代へ受け継がれているのか、昔話には子どもに伝えたいそれぞれの時代の考え方や教訓がメッセージとして描かれていたのである。例えば、猿蟹合戦では猿が木に登って一人で熟れた柿の実を食い、青い実を蟹に投げつけて殺すといった場面は残酷で子どもの教育上問題があるという意見から書き換えられ、現代では蟹や猿は怪我をする程度で猿は反省して平和に暮らすというものに改作されている。また、白雪姫では王様は幼児性愛者として、白雪姫が生まれる前にも幼い姫と関係を持っていたが、妃は自分が妻だという事実を支えられながら耐え忍んでいた。しかし、可愛らしく美しく育つ白雪姫にも王様の手が伸びていたことを知り、嫉妬と孤独に苛まれ“白雪姫を殺した”という場面は、現代では、この世で最も美しいと謳われる白雪姫に嫉妬した妃があらゆる手段を使って白雪姫を殺そうとする、というものに改正されている。

このような性をほのめかす描写が削除された理由としては、卑猥な表現が含まれている物語を無垢な子どもに顔を赤らめずに話すことができようかという意見や語り手の粗野な表現をそのまま用いた為、物語が損なわれている等の批判を受け、版を重ねる度にその時代に合った形へと手を加えたのである。昔話は親が子どもに聞かせる場合が多く、その為、子どもの成長に悪影響とならないようにと良い話へと変換されて伝えられた場合が多く、その話が子から子へ、孫へと伝わったと考えられている。すなわち、その時代特有の教育的な考え方の象徴として、昔話は書き換えられてきたのである。そして、その時代ごとの教訓やメッセージを子どもに伝える為に子どもの成長の手段として用いられるように、現代も昔話が受け継がれているのだと言えるであろう。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において２００８年から２０１１年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は２００８年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、２０１８年８月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思いますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

２０１８年８月８日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治